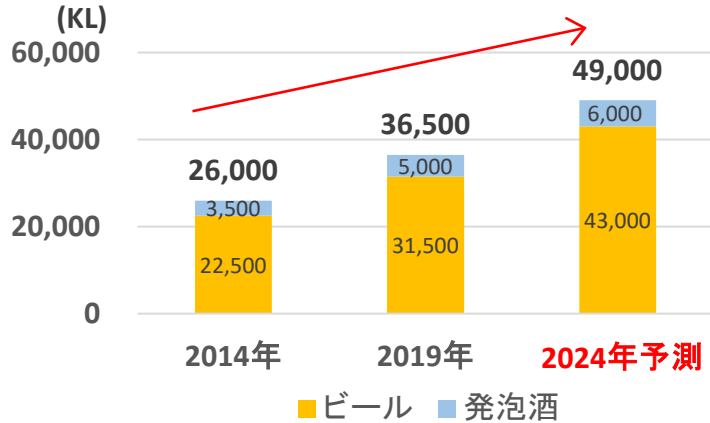




クラフトのビール+発泡酒



クラフトビール+クラフト発泡酒

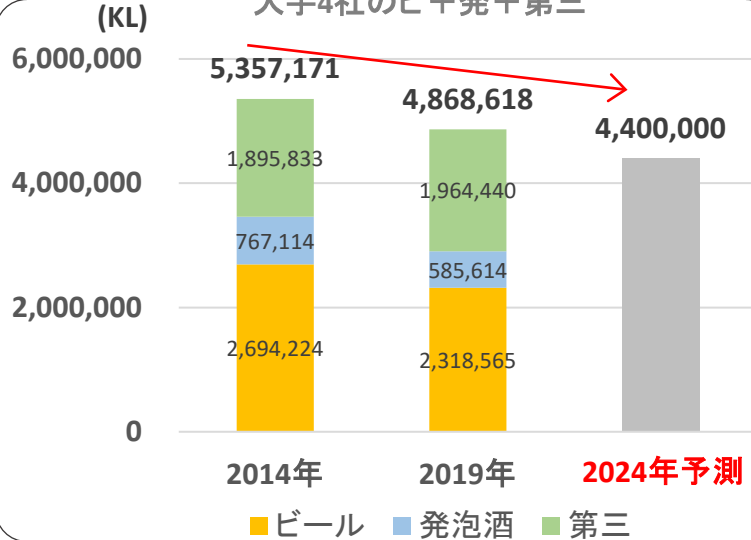
- 「2014年2万6,000KL、2019年3万6,500KL」はきた産業の推計値で、大手のクラフト・ブランド(キリンのスプリングバレーなど)を含む。
- 国税庁の「地ビール等製造業の概況」(回答任意の調査。大手5社は含まない)では、平成30年度(≒2018年)3万4,419KL(ビール2万9,661KL+発泡酒4,758KL。本資料作成時点でこれが最新版で、平成31年度版は未公表)
- キリンは独自に数字を公表→「2019年4万7,000KL」<https://www.kirin.co.jp/entertainment/daigaku/ZMG/dst/no112/>

(参考対比)大手ビール4社のビール+発泡酒+第三のビール

- 酒類食品統計月報による。オリオンは含まない。
- 委託生産の扱い: 2019年からのキリンのイオンのPB、「バーリアル」(2018年まで韓国製)は含む。

参考対比

大手4社のビ+発+第三

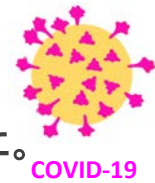


2019までの5年間の変化

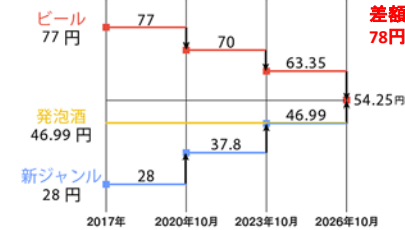
- クラフト: 2015~2018年の4年間はブームで量が伸びた。2019年は伸びが止まってほぼ2018年並み。一方、開業ラッシュは2019年も続いている。
- 大手: 減少の一途。RTDが伸びた5年間。

2020からの5年間の変化

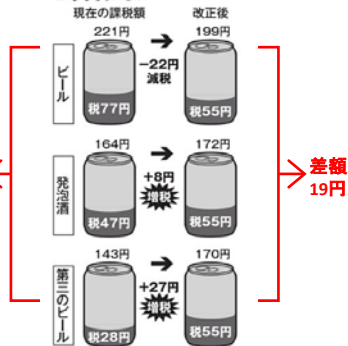
- COVID-19で「外飲み」は大幅減、「家飲み」に。
- 酒税の変更。ただし、2024年はまだ完了前。
- RTDも2021-22年には頭打ちを予測。
- 2021東京オリンピック(?), 2025大阪万博。



酒税改正の流れ



税改正でビールの価格はこう変わる!



2024年の予測値

- 値は当社の予測。大手の3分類比率は推測不能。
- ただ、「税改正で第三はなくなる」と言われたが、案外残りそうだ。

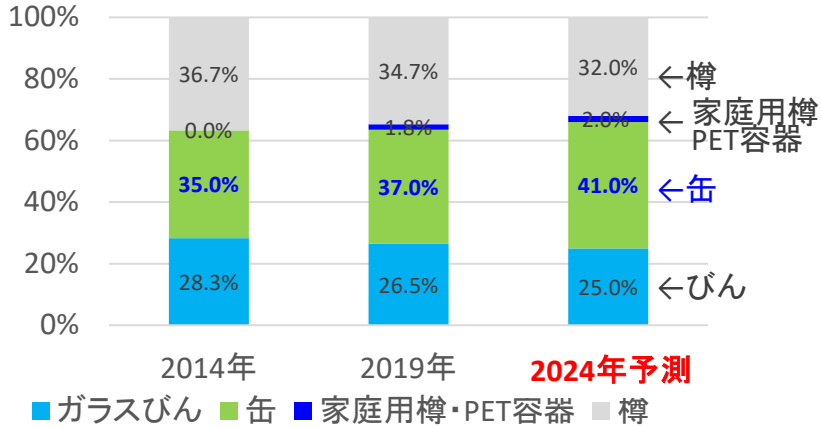
(出所) アサヒGHD資料を基に筆者作成
(注) 350mlあたりの税額

<https://jp.ub-speeda.com/analysis/archive/66/>

http://www.newspostseven.com/archives/201611_29_470088.html?IMAGE&PAGE=1

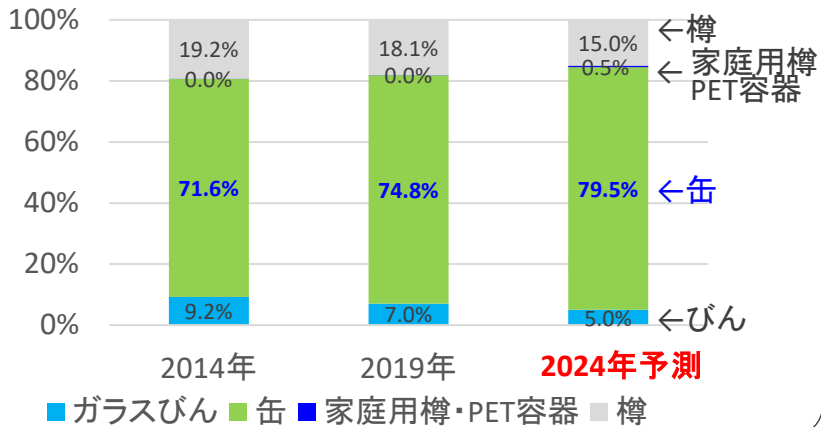


クラフトのビール+発泡酒、容器別の比率



参考対比

大手4社のビ+発+第三、容器別の比率



クラフトビール・クラフト発泡酒の容器比率

- チャートの数字は、きた産業による推定。
- 国税庁の「地ビール等製造業の概況・平成30年度（≒2018年）」では、びん27%、缶39.3%、その他1.6%、樽32.1%。
- びんは330mlが94%と圧倒的。
- PET容器にはキリンのタップマルシェ向けを含む。

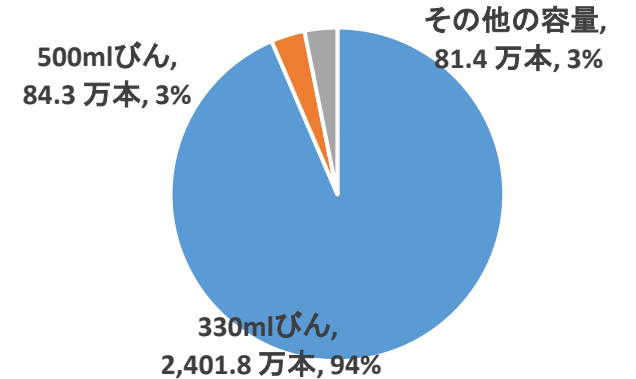
(参考対比)大手の容器比率

- 缶比率が圧倒的。
- びん比率は2019年時点で7%程度。びんは3種のうちほぼ「ビール」のみで、ビールとしては15%程度。ただ、COVID-19による「家飲み」シフトで、2020年以降は大幅減を予測。
- びんは、500mlのリターナブル中壺が60%と圧倒的。

2024年の予測値

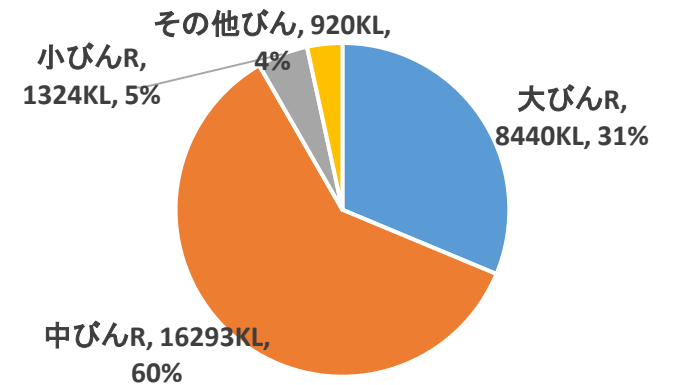
- クラフトも大手も、缶の比率は2019年より4ポイント程度上昇すると予測。
- クラフトの缶需要は増えるものの、ビール類市場全体の縮小によって、ビール缶の総数量は減少。2019年=105億缶程度 → 2024年予測=95億缶程度。RTDの缶も減る。
- 1L～3LのPETボトルによる流通が増える？

クラフトの「壺」(単位万本)



参考対比

大手4社の「ビール(のみ)」の「壺」(単位KL)





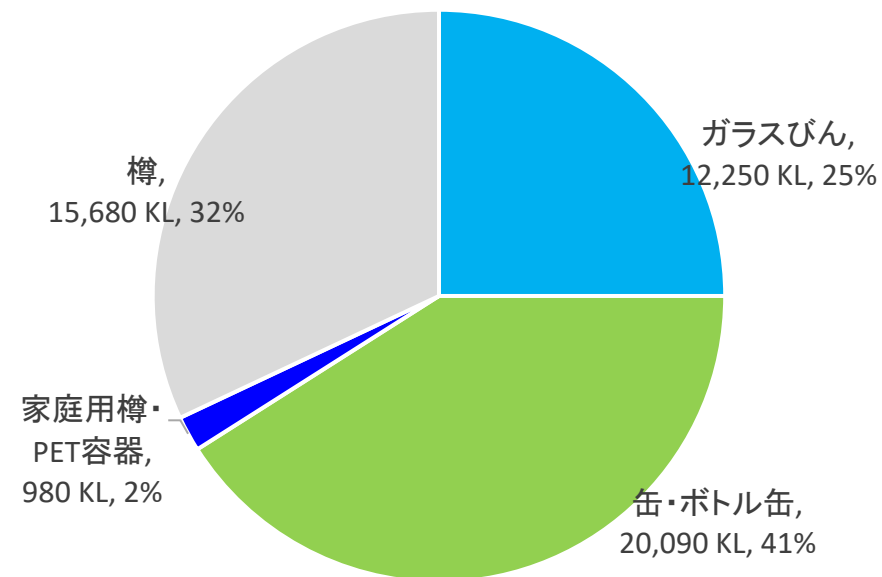
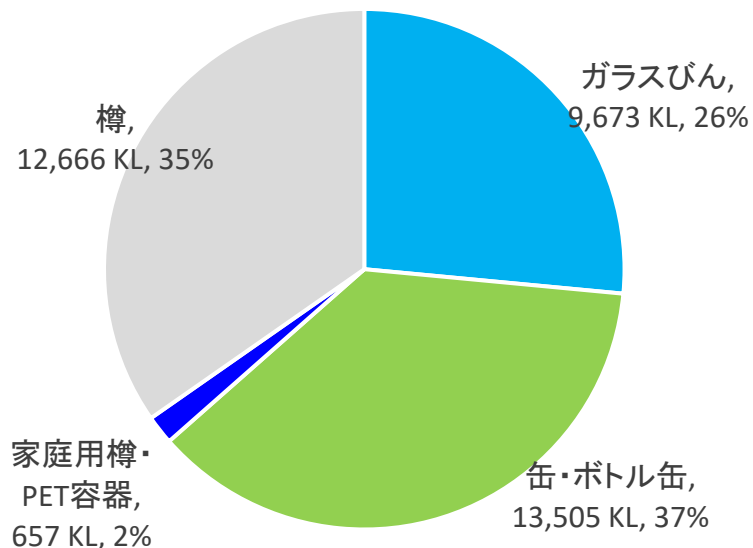
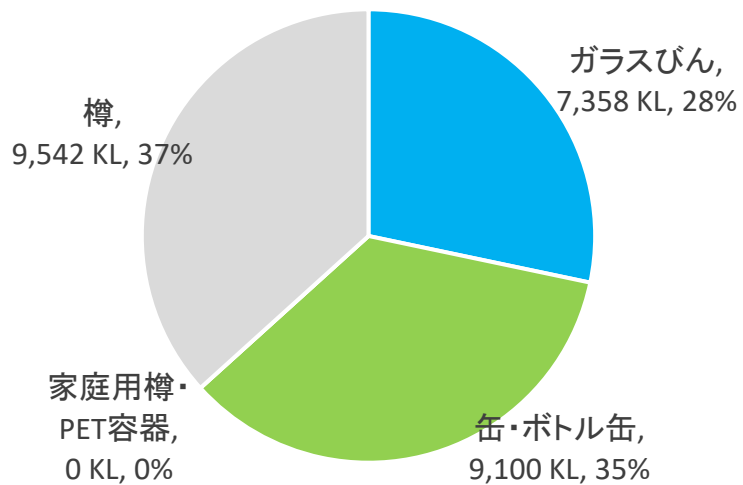
2014年 = 26,000KL
ビール類総量の0.5%



2019年 = 36,500KL
ビール類総量の0.75%



2024年予測 = 49,000KL
ビール類総量の1.1%



びん

2,000万本

2,600万本 (5年で23%増)

予測 → 3,200万本 (5年で27%増)

アルミ缶

2,500万缶

3,800万缶 (5年で50%増)

予測 → 5,800万缶 (5年で49%増)



KITA SANGYO

びん

- 初めてクラフトビール(当時は地ビール)専用びんを製作
- 容量は(大手のびん容量334ml、缶に準じた350ml、海外の12oz=335mlなどでなく)330mlを採用、現在は330mlが業界標準に



● **日本初の「地ビール専用びん」**は地ビール解禁の年である1995年に当社のオリジナル型として、モクモクのために製作した「KHB330」。柏洋ガラス社とのパートナーシップ。

● 現在でも、KHB330はクラフトビールで最も多く使われる壺の一つ。

● **国産初の「地ビール充填機」**はルーツ機械研究所製「Beer Freund」(2ヘッド充填)で、1995年に納入。以来BFシリーズは改良を重ね、現在「シリーズV」。日本のクラフトビールの半自動壺詰め機のベストセラー。

付録1: 地ビール・クラフトビールのパッケージにおける、きた産業の足跡 2020.07.28



缶

- 初めてクラフトビール(当時は地ビール)の缶を商品化
- 日本初だけではなく、おそらく世界初のクラフトビール缶



● **日本初の「地ビール缶」**は1996年発売のエチゴビール。アルミの3ピース缶で、通称「レトロ缶」。東洋製罐とのパートナーシップ。当社が「清酒お爛機能付き容器」の製造に使っていた缶体を転用して提案したもの。たぶん、世界初のクラフトビール缶でもある。(写真は、当時のレトロ缶と現在のDI缶)

● **日本初の「小型・自動ビール缶詰め機」**はルーツ機械研究所製「Beer Radix」(1ヘッド充填+1ヘッドシーマーのモノブロック)で、1997年に納入。以来、大手ビールの研究所向けを含め、現在までに25台程度製作。Beer Radixは、現在も世界に類似機の無い、世界唯一の少量生産自動ビール缶詰め機。

● **日本初の「ロータリー・地ビール用缶詰め機」**は<ドイツSMB社の6ヘッドロータリー充填機>と<ROOTS製2ヘッド缶シーマー>を合体させたモノブロックで、1998年に納入。2,000cph程度の缶ビール充填機としては、たぶん世界初でもあった。

王冠

- 初めてクラフトビール(当時は地ビール)のための汎用デザインの王冠を準備
- 市販商品として日本で初めて脱酸素王冠をクラフトビールで商品化



● **日本初の「地ビール用汎用デザイン王冠」**として、当社がデザインしたもの。通称「ムギマーク」。NCC社とのパートナーシップ。

● デザインは広く受け入れられ、現在も「ムギマーク王冠」は年間500万個以上、「ムギマークMaxi」は年間100万個以上使用される。クラフトビールで最も多く使用される王冠・キャップ。



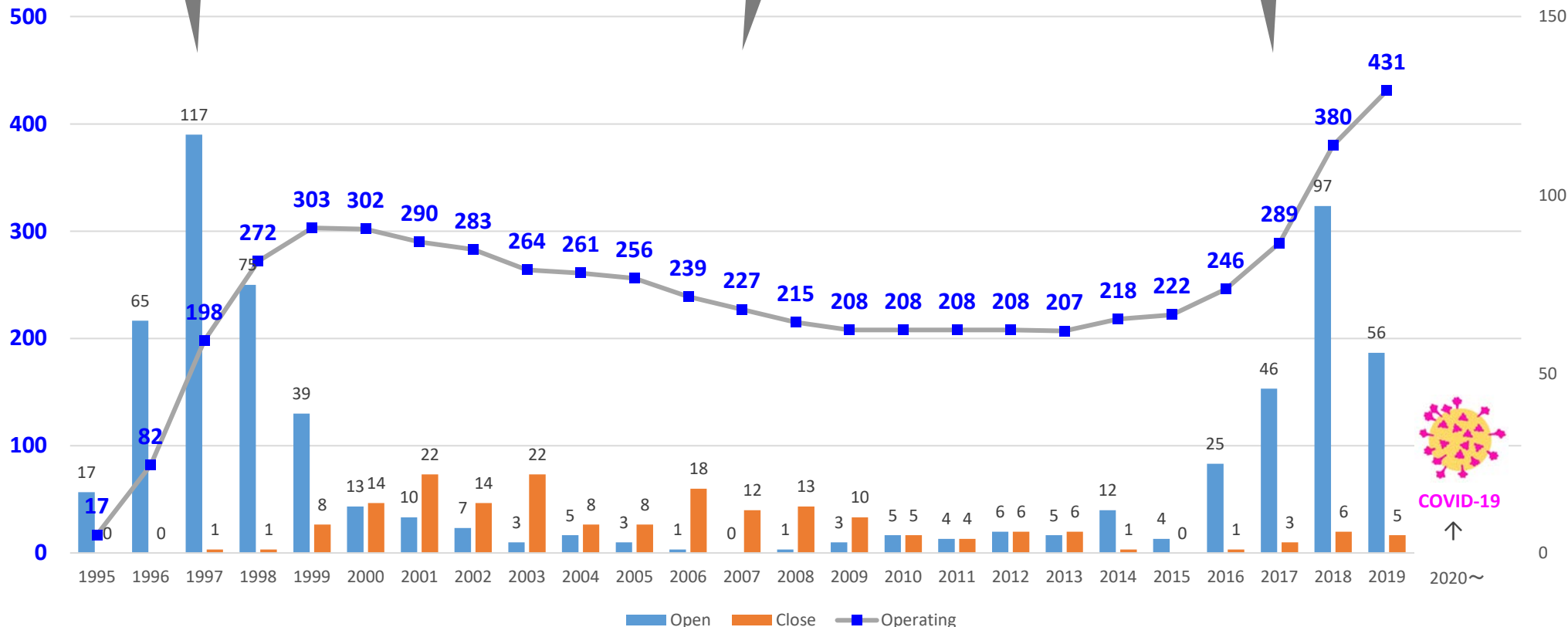
■1995～1999年: 急増の5年■
 平均開業: 62.6軒/年
 平均閉店: 2.0軒/年
 設備資金に1～3億円をつぎ込んだ時代。
 ピークの99年には303社が操業。

■2000～2014年: 淘汰の15年■
 平均開業: 5.2軒/年
 平均閉店: 10.9軒/年
 実は美味しくない地ビールが多い、と言われた時代。大手ビールで「発泡酒」のシェアが増加し、さらに安価な「第三のビール」が出現した時代でもある。
 10年間で163社閉店、15年で300社強から200社強に。生き残った醸造所、新規参入では味や品質の改善が進んだ。

■2015～2019年: 再ブームの5年■
 平均開業: 45.6軒/年
 平均閉店: 3.0軒/年
 ビール品質が全体として安定、世界的なクラフトビールブームもあって、市場が再拡大。
 大手の本格参入を契機に、「地ビール」より「クラフトビール」が一般呼称に。外国人経営醸造所も増えた。そして、2020年、COVIDに直面。

年末時点における
 操業中の醸造所数
 (折れ線グラフ)

1年間の新規開業と
 閉店の醸造所数
 (棒グラフ)



資料の出处 → きた産業の独自調査 <http://www.kitasangyo.com/beer/MAP.html>

発泡酒免許や、大手ーサッポロ・キリン・アサヒーが経営した・するクラフト・ブルワリーを含む。閉店の時期: 免許があっても閉店した時点で削除する一方、実名を掲載している関係で、消息が曖昧な場合は削除が遅れる場合もある。2020年7月時点で、過去のデータの一部を遡って修正したので、今までに公開した資料と異なる部分がある。